



動物たちの
三つの
ふしぎなおはなし



三橋 一夫

おはなしの、はじまるまえの、おはなし

5

① 孫悟空はご先祖さま

15

第一部

② キジと多頭魔虫たとうまむし

25

③ カラス飛行隊

39

④ 再会

49

⑤ 二度の大爆発

57

第二部

- | | | |
|---|------------|-----|
| ⑤ | サムライアリとの戦い | 134 |
| ④ | アリのチヨキリくん | 124 |
| ③ | インコと詩人 | 115 |
| ② | 仲間と別れて | 107 |
| ① | ブーブとのであい | 98 |
| | 98 | |
| ⑧ | さらば、ふるさと | 87 |
| ⑦ | まもり神 | 77 |
| ⑥ | 画家との出会い | 68 |

第三部

③	静かな親友	180
②	おそろしい天国	172
①	ねむい朝	164
	164	
⑧	ベエおじさん	157
⑦	かわり者のゲンゴロウ	151
⑥	シラカバ園のブンチョウ	142

おはなしの、 はじまるまえの、おはなし

このまえ、わたしは『学園祭』のおはなしを書きました。

そのなかで、小学五年生のラッキョウくんのことをかきました。

もちろん「ラッキョウくん」というのはアダナです。本名は別に、ちゃんがあります。

赤ちゃんのころ、首が細く、頭が大きいので、おとうさんが「この子はラッキョウ頭だな」といったのははじまりです。学校にあがるようになって、友だちからも先生からも、「ラッキョウくん」とよばれていました。

こんどのおはなしでも、ラッキョウくんが主役で、まえのおはなしと同じ五年生のときにおこったことです。ですから、こんども、このまえどつりに「ラッキョウくん」とよぶことにします。

読者のみなさんは、ケダモノや虫が人間のことばを話せることを知っていますか？

たぶん、知らない人のほうが多いと思います。

でも、犬やネコや、馬やウシ、それから飼われている小鳥などが、かわいがつてくれる飼い主の言うことを、よく聞きわけることは誰でも知っているでしょう。

自分ではなにも飼っていない人でも、他人から聞いたり、本でよんだりしたことはあるはずですよ。

こんなお話があります。

むかし、あるお寺の和尚さんが一匹の猫をとともかわいがつて、長年飼っていました。

ある静かな夜、和尚さんが、誰もいないはずの本堂のほうで、かすかな物音がしたのを耳にしたので、こわごわ本堂に近づいて、ソーツとのぞいてみました。すると本堂の鴨居の上を走るネズミをみつけたその猫が、鴨居にとび上つてネズミを追いかけているところでした。

ところが、せまい鴨居の上を走るのはネズミのほうがじょうずです。

まして、その猫はもう年よりで、からだはデブデブで、あしはヨロヨロしていましたから、若かったころのようにはゆきませんでした。

ネズミが鴨居の上の小さな穴に逃げこむと、その猫は「ナムサン!!」ときけんで、そのひょうしに足をすべらせて、下におちると、また「ザンネン!!」と叫びました。

その猫は、ずっとまえから、人間のことばがはなせたのでしょうか、それをかくしていたのです。

びつくりして本堂にとびこんできた和尚さんが、その猫に、

「おまえは人間のことばが話せるんだね。じつは、この夏の真夜中、お月さんのてらす裏庭で、おまえがわしの手拭でほっかぶりして、たくさん仲間の猫たちと踊ってるのを、廁の窓から見てもうた。でも、まさかおまえが、そんなにじょうずに人間のことばが話せるとは、ちっとも知らなんだよ」

というと、年よりの猫は、恥かしそうに頭をたれていましたが、シオシオとお勝手のほうにいつてしまつて、それきり姿を見せなくなつた——というお話です。

このおはなしが、ほんとにあつたことかどうかはわかりません。

でも、オウムや九官鳥が、人間そっくりの声を出すことは、誰でも知っています。

人に飼われていない野生の動物は、鳥でも、魚でも、アリのような虫でも、みんな団体になつて行動しています。おたがいにコトバが通じないと団体行動はとれません。

もともとオトというものは電波ですから、コエでも、コトバでも電波です。

日本語の「アリガトウ」でも、英語の「サンキュウ」でも、ドイツ語の「ダンケ」でも、中国語の「シェシェ」でも、同じ感謝の気持をつたえる電波です。

声（の電波）を聞いているのがラジオで、目でも（電波を）受信しながら、コエ（の電波）も

耳で受信しているのがテレビです。

目で見えるもの、耳に聞こえるものばかりでなく、匂いも電波です。

犬は人間の何千倍もの匂いをかぎわけけることは誰でも知っているでしょう。

人間ばかりでなく、動物にはみんな感覚というものがあります。感覚とは、電波の受信機のことです。

人間は、人間の電波受信機（目や耳や鼻など）の、受信できる範囲でしか受信できません。

人間の耳では聞えないほどの大きな音なら、耳のそばでハレツしても聞えないし、小さすぎる音は、犬には聞えても人間には聞こえません。

犬や虫には見えても、人間には見えないものもあるはずですよ。

また、訓練された警察犬は、犯人のハンカチをかいで、犯人の匂いを知ると、その足あとを追ってゆきます。でも、訓練されていない犬では、そうはゆきません。

人間に飼われた動物でなければ——野生の動物なら、仲間のハナシはわかりますが、人間のコトバはわからないはずですよ。

猟犬は、犬仲間や飼主の他に、ウサギやカモなどのコトバも聞きわけけるでしょう。

そうでなければ、ジツと用心してかくれているものを、ただ二オイだけで、探偵みたいにさが

し出すことはできないはずでず。

外国人の小さい子どもでも、日本にきて、まいにち日本人とつきあっていたら、じょうずに日本語をはなすようになります。

日本人が日本で英語の勉強をして、ひとりのときはじょうずに英語がはなせても、英国人と話すとなると、オトナでも、はじめははずかしくて、「英語など話せません」と逃げたがるものです。同じ人間どうしでもそうです。

三度の食事をもらって、かわいがられている動物は、飼い主の人間を、自分たちより一段上の生きものとして見ているはずでず。

よく、田舎の人が都会に住むようになりますと、口をきかなくなりませんが、イナカコトバで話すがはずかしいからでず。イナカナマリがはずかしいのでず。

英国人に英語ではなすのがイヤなのは、「日本人ナマリの英語だらう」とはずかしいのでず。和尚さんの猫が、それきり姿をみせなくなったのは、たぶん、そのせいでしょう。

でも、どんな動物でも、人間の子供とは、すぐ仲良しになります。

犬猫でも、馬でも、スズメでも、オカイコでも、アリでも、金魚やコイでも、子どもがベチャクチャしゃべるのを、ちゃんと電波として受信しています。

そして、オトナほどはずかしがらなくてもいいと感じているはずです。

また、動物は、動物をスキな人は、すぐにわかります。

動物ギライの人は、よく犬にほえつかれます。犬をこわがっている人には、犬がからかって、カカトをかむまねをしてオドカシたりします。

馬をコワがつている人は、馬に乗っても、馬がバカにして、けっして乗りてのいうことをききません。

人間がうれしいとバンザイするように、犬はシツポをふります。

人間がおこると目玉をむいて、ハギシリするように、猫はツメをむき出して、ウナリます。

からだのかっこうがちがいますから、気持のあらわしかたはすこしがちがいます。

でも、人間も動物の仲間ですから、みんなとほとんど同じなのです。

ラッキョウくんは、生れつき動物が大スキでした。

もっと小さかったころには、アリアや、毛ムシや、ハエまで飼って、おとうさんに叱られたこともありました。

子犬を拾ってきてしかられたことは何回もありました。

いちど、おとうさんが、